

印象17編 —2021年5月の総評に代えて

○林 桂○

・幼い時の体験を書いたと思しき作品に共感することが多い。もちろん、そこに優れた作品があったからに違いないが、佳作に推した作品を改めて読み直しながら、私自身の思いがそうした時間へ飛びたがっているのかもしれないと思う。

総評の作品を選び、総評を書き終えて、調べて画竜点睛の作者名を入れた。その時には何時も新鮮な驚きがある。今回はまちりこ氏の作品が多いのに驚いた。先に書いた私の思いとまちりこ氏の作品がシンクロしたのだろうか。

●細村星一郎●(東京都)

ちこくちこくちこく
アネモネみてちこく

*「アネモネ見ていて遅刻しました」は、言い訳にならない。むしろ、本当にあったこと。ある朝、庭か通りすがりの公園などで一瞬アネモネに目をとめ、見とれたと考えるべきだろう。分刻みの朝のスケジュールを、アネモネの花が狂わせた。心のつづやいている言葉ふうである。

●風船●(東京都)

晴れててよかった

陽光が好きだったから

*大切な親族を亡くされた葬儀の日の思いだろうか。最後のせめてもの慰めの思いだろうか。空白の一行が大切な表現になっている。

●まちりこ●(埼玉県)

ティッシュに唾をつけて
幼い私のほっぺの汚れを
拭いてくれた母へ捧ぐ日

*母の日。ほっぺの汚れは、涙の跡にできたものだろう。慰めてくれた、幼い日の母の姿が、感謝の原点としていつまでも残っているのだろう。

●まちりこ●(埼玉県)

古井戸に投げた小石の音を聴く
空蟬ひろい持ち帰る夏

*夏休みを孤独に過ごす子どもは多い。作者もそのひとりだったのだろう。どれもひとり遊びである。孤独だった自分の幼い日々を労る趣きである。詩人・伊藤信吉は、空蟬をマッチ箱に入れて持っていたという。孤独な詩人の魂を見る思いで聞いて、忘れられない。

●ヒロミヤカザル●（京都府）
積み上げた本に
マンモスのフィギュアを載せる

* 積み上げた本に檸檬爆弾を仕掛けたのは梶井基次郎だが、このマンモスのフィギュアは爆弾の幻想を持っていそうもない。圧巻幻想でもないように見える。本で置き場がなくなったために上に置いたという風情である。ひとりの部屋の風景としてユーモラスで面白い。

●降旗 沃●（東京都）
近所に住む
異星の友人と
ビー玉交易

* 現実の境界が朧な子どもの世界には、すぐ近所に異星人が住むことが可能である。いつもビー玉交換をする友達も、実は異星人である。あるいは、本人が異星人だと名乗った可能性さえある。そうなれば、もう異星人確定である。

●まちりこ●（埼玉県）
端っこに写っているのが
父さんです

* 家族写真か、職場などでの集合写真

か。父は、いつも端っこに写るような人なのであろう。端っこの写真で印象深いのは、歌人・土屋文明の諏訪高女の卒業写真である。若き校長・土屋文明は最後列に写っている。卒業写真の主役は誰か。心得ていた人なのである。

● まちりこ ● (埼玉県)

ひとり旅 片手はいつも写らない

* 自撮り写真のための携帯を持つ手はいつも写らない。当たり前のことではあるが、それが一人旅を象徴すると気づいたのだ。

● ベロニカ ● (神奈川県)

恋なんか知らないくせに
チョコレート

* これはチョコレートに語りかけている独語だろうか。もちろん、この対には私は恋を知っているという思いがある。「チョコレート」という表記も面白い。じゃんけんのチョコキで勝ったときに歩数を数えるときのいい方をなぞっているようだ。なにか初恋の趣である。

● 大橋 弘典 ● (群馬県)

朝日やわらかエスカレーターも夏

*大型施設の吹き抜けに作られたエスカレーターには、光りが集められている。その柔らかい朝日は、既に初夏の輝きに満ちている。

●まちりこ●(埼玉県)

あの夏のキリンが今でも家にいる

*「あの夏」とはいつか。どのような形で今もキリンは家にいるのか。明瞭な一つの答えは浮かばないが、一読、忘れられなくなる魅力に満ちている。

●まちりこ●(埼玉県)

あの日

うさぎ小屋の鍵をかけたのは

私です

*学校で飼育していたうさぎ。当番で餌をやっていたのである。ある日の当番で鍵をかけ忘れ、うさぎが逃げ出すようなことがあったのだろう。その鍵をかけ忘れたのは、自分だと名乗れないまま、大人になったのである。もう、時効でのカミングアウトである。しかし、どこかで一度は言わずにはいられない思いとともに、生きてきたのであろう。しかし、案外、まわりは察していて、誰も責めなかっただけかもしれないと思う。

●まぢりこ●(埼玉県)
砂場のどこかに隠された
わたしのスコップは
結局、
最後まで見つからなかった

*イタズラかいじめか。隠した当人はすっかり忘れていたようなことかもしれない。しかし、「わたし」の思いは、いまだに探し続けている。

●豊富 瑞歩●(茨城県)
隣人が夜勤へ向かう
単色の麺をゆがいて
まだ生きている

*「単色の麺」に、日常の思いが反映している。夜勤に出かける隣人も同じような思いに、生きているに違いない。「まだ生きている」としか言えない切なさ。

●小島 涼我●(佐賀県)
君と映る写真の空が青すぎて夏と
はいつもいつもあなただ

*「君」と書き出して「あとな」へ趣く。感情の高まりを人称の変化で表現して巧みである。

●まぢりこ●(埼玉県)

梅雨時の日差しの白さ

図書室で二人並んで窓を見ている

*「図書室」だから学校の中であろう。二人で並んで勉強する放課後。二人とも、窓外に視線を遊ばせている。勉強に疲れたか捗らないか。「日差しの白さ」の表現と空白の一行の使用が巧みだ。全体が、青春詩とも言うべき抒情に輝く。

●降旗 沃●(東京都)

浅い緑がよく映える

団地の鉄筋コンクリート

老女が独り一日を繰り返す

*「一日を繰り返す」の表現が巧み。一日一日の余生を孤独に生きる老女の姿だ。どこかにゆくのもない、どう変化するのもない日々なのだ。